

ふれあい

第 172 号

令和 3 年 9 月
青森県立中央病院
(題字は藤野院長)



三代目青森県立中央病院麻酔科部長就任

麻酔科部長
木村 尚正



令和3年4月から青森県立中央病院麻酔科部長を拝命することになった木村尚正です。当院に常勤医師として勤務を始めて間もなく延べ20年になります。部長としてはまだ5ヶ月の新米です。

私が当院で医師として働いた今までの期間においては東日本大震災という未曾有の災禍が発生し、当院を含めて青森県の皆様もこれに巻き込まれました。現在は新型コロナウイルス流行の最中であり、兼任している手術部長としても当院の重要部門の一つである手術部を預かる身としてより一層気を引き締めているところであります。

私の医師としての主な業務は麻酔科医として医療を提供することにあります。一般的な麻酔科医師の業務内容としては主に手術室を主戦場とした麻酔管理、種々の痛みの管理を目的としたペインクリニック、急性期に集中的かつ集学的管理を行うことで様々な重症患者の高度な治療を目的とした集中治療の3つの分野が挙げられます。

手術室における麻酔方法については全身麻酔と局所麻酔に大別されます。最近では超音波診断装置を用いることで、より確実性の高い神経ブロック法が鎮痛法の一つとして確立しております。それらはより質の高い術中・術後鎮痛の提供に貢献しております。

ペインクリニック領域については現在週3回の麻酔科外来を窓口疼痛を有する各種疾患症例の治療に携わっております。最近の特徴としては帯状疱疹後に後遺症として残った神経痛への対応について相談を受けることが多くなっております。薬物療法や理学療法を中心にしつつ必要に応じて入院を要する治療法(神経ブロックなど)を併用し、疼痛に苦しむ患者さんの一助となるよう日々

診療しております。近年は難治性疼痛に対する内服治療薬の選択肢も著しく増えたため侵襲的な治療を選択せずに済む患者さんも増えました。

集中治療部門については現在主治医制による管理となっております。麻酔科医も他科スタッフと同様に必要時に対応しております。

以上のように麻酔科医師は3つの柱をその専門分野の一部として活動しておりますが、当院の麻酔科業務における主軸となっている手術室での業務内容についてご紹介いたします。

当院は青森県の中核病院の一つとして周囲の医療施設からの紹介患者も多く取り扱っており、我々麻酔科医師も前述の麻酔管理技術を駆使して通常の待機的手術に加えて多数の緊急手術にも対応しております。また当院は活動性の高い新生児集中治療室(NICU)や総合周産期母子医療センターを初めとした複数の専門領域を守る診断治療センターを有しているため近隣の医療施設から多数の症例を紹介されます。そのため待機のおよび緊急を問わず帝王切開症例数が特に多いことも特徴として挙げられます。加えて近年は内視鏡下手術支援ロボットの導入やハイブリッド手術室の整備も行われており先進医療への対応も着々と進んでおります。

一方で最近では新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響が本県の医療事情にも影を落としており、当院手術室における手術件数は近年減少傾向にあります。

当科としては関連部署と密に連携していくことで手術を受ける皆さんが可能な限り安全に治療を受けられるように注意深く診療を続けていく所存ですので今後もよろしくお願ひ致します。

新型コロナウイルスワクチン接種後副反応報告

(集計・まとめ 青森県立中央病院薬剤部)

1. 対象・方法

- ・新型コロナウイルスワクチンを接種した当院勤務職員を対象
- ・1回目は、接種した1770名のうち1380名回答（回答率78.0%）
- ・2回目は、接種した1728名のうち1323名回答（回答率76.6%）

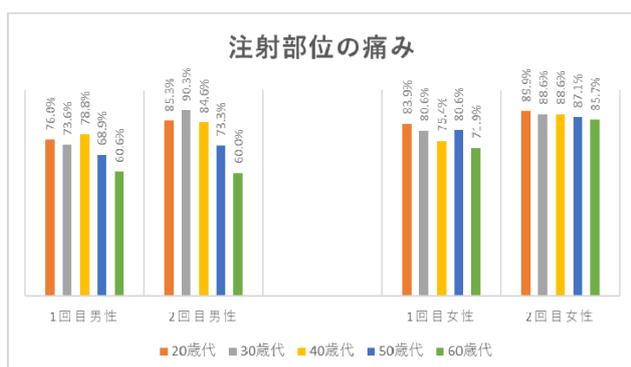
2. 集計結果の概要

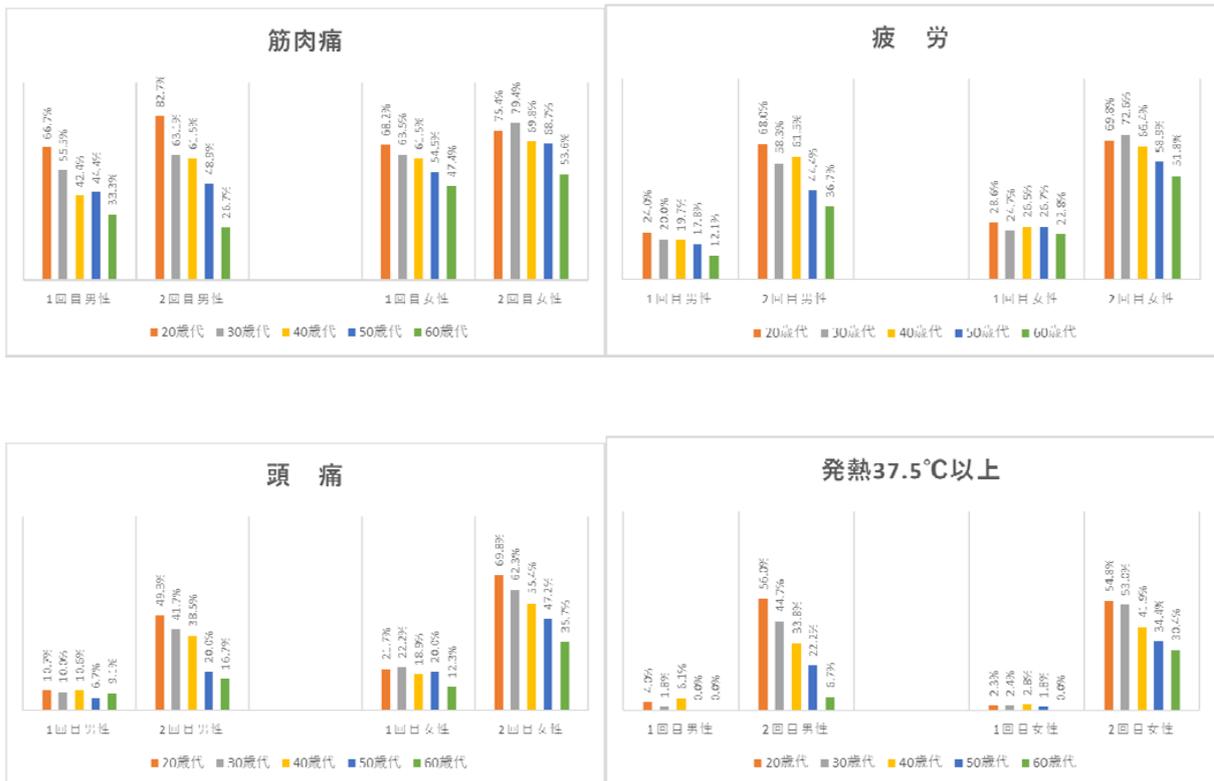
- ・最終集計は、4月30日付けの中間調査報告とほぼ同様の結果となりました。
- ・いずれの症状においても、2日目にピークをむかえ、ほとんどの人が7日目には消失しました。
- ・注射部位の痛み・筋肉痛は、接種回数および男女別に関わらず、頻度が多い副反応でした。
- ・1回目で発生頻度が少なかった疲労・頭痛・発熱（37.5℃以上）は、2回目の方が多くみられました。
- ・年代別に比較すると、注射部位の痛み・疲労については、大きな差は見られませんでした。
- ・筋肉痛・頭痛・発熱（37.5℃以上）は、年代が低くなるほど発生率が上がる傾向がみられました。
- ・1回目はアナフィラキシーおよびアナフィラキシー前駆症状が各1件、2回目はアナフィラキシー1件ありましたが、いずれも回復しました。（3件とも女性）

3. 1回目と2回目の副反応比較



4. 副反応発生率（年代別・男女別）





5. その他の副反応

- その他の副反応については、自発報告された回答内容を集計しています。
- 上記 2.~5.の発熱は「37.5°C以上」としていますが、微熱（37.0~37.4°C）の報告も多かったです。
- ほてり・発疹・かゆみ・腕・手指の痺れ・下痢などは、1回目2回目ともに頻度が多い症状でした。
- めまい・眠気・風邪様症状（鼻水・くしゃみ・咽頭痛等）などは、1回目の報告が多い症状でした。
- 微熱・リンパ節の腫れ・腰痛・胃症状（嘔吐・吐き気・胃部不快感・胃痛等）などは、2回目の報告が多い症状でした。

	1回目 (人)	2回目 (人)
微熱 (37.0~37.4°C)	7	33
ほてり感	17	11
めまい・浮遊感	15	8
発疹	11	16
かゆみ	14	18
眠気	10	3
あくび	4	1
息苦しさ	3	3
動悸	3	3
胸痛	1	5
リンパ節の腫れ	3	28
首~肩痛	5	6
腰痛	4	12

	1回目 (人)	2回目 (人)
腕のだるさ・違和感	7	2
腕・手指の痺れ	11	13
下痢	10	16
腹痛	4	4
嘔吐・吐き気	8	33
胃部不快感・胃痛	0	9
食欲不振	1	5
鼻閉	5	2
鼻水・くしゃみ	10	5
咽頭痛・喉不快感	9	5
咳	3	3
唇・口腔内の違和感	4	3
眼の違和感・眼痛・浮腫等	3	4
耳痛・耳鳴り	2	4

詳細は県立中央病院 HP からご覧ください。



移植患者さんへの栄養・食事サポート

栄養管理部技師
長内 麻里子



栄養管理部では様々な疾患に対応する食事が提供できるように特別食を準備しています。今回はその中から、血液内科に入院中の患者さんに提供している病院食について説明させていただきます。

血液内科に入院する患者さんは、血液疾患の治療として化学療法や造血細胞移植を行うため、その際に使用する薬の影響などで免疫機能が低下する場合があります。免疫機能が低下した場合、食品を介した感染症に注意が必要となります。そのため、これまでは患者さんへ持ち込み食品についての注意点や、ペットボトル飲料を飲む際の注意点などをお知らせした上で、病院食としては「加熱食」や「無菌室食」を提供してきました。加熱食・無菌室食は「造血細胞移植ガイドライン」を参考に献立を作成し、すべての食材を加熱して提供していますが、すべて加熱することで、衛生面で安全は担保されますが、使用する食材によっては硬くなってしまふ、野菜などはべちゃべちゃとした食感ばかりの料理になってしまうという難点がありました。さらに調味料で味付けをせず、パックの醤油などをお膳に付けて患者さんにかけていただくような食事提供というのが現状でした。加熱食・無菌室食を食べている方から、「病院食は全部火が入っていておいしくない。硬いこともあるし、味は同じ味だし。だったら、自分はカップ麺を食べる。」という声を聴くこともありました。

先生がせっかくよい治療を施して下さいながらも、食事を食べないことが患者さんの栄養状態を悪化させる要因になってしまうかもしれません。この現状を打破するために、この度、全国の造血細胞移植実施施設にアンケートをとり、その結果を元に血液内科の先生方、看護師の方と相談し、当院独自の加熱食・無菌室食を作りました。また、お薬の関係で免疫機能が少し落ちている患者さんが安全にかつよりおいしい食事を食べられるように「低菌食」という食種を作り、2021年9月から運用を開始することになりました。

低菌食は9月から運用開始となるため、本稿を記載している時点で直接患者さんからの声を聴くことができませんが、喜んでいただければいいなと思いながら記載しています。低菌食を作成するにあたり、提供基準を決めた上で、ほとんど一般食と同じ料理を食べられるようにしました。これまでは提供できなかった生野菜も洗浄方法や2次汚染(調理中の食品が、まな板や調理器具類あるいは調理する人の手を經由することで細菌やウイルスに汚染されること)がないように作業工程を見直すことで、提供可能となりました。また、

今まで味付けをせずに調味料をパックで提供していた料理も、ブラストチラー(調理仕立ての食品を3℃付近まで急速に冷却することができる装置)が導入になったことで、調理後の急速冷却が可能になったため、食品の安全性を担保しながら和え物などの提供が可能となりました。

患者さんにお渡しする「免疫抑制時の食事について」のパンフレットイメージ図を以下に示します。

免疫機能が低下した期間に食べる食事が、今回の改善で少しでも良い方向へ向かっていただければと思います。

今後も、今の食事内容で満足せず、患者さんのため「治療に向かう力」となるような食事を提供できるように頑張っていきたいと思っています。

最後に、加熱食・無菌室食の見直し、低菌食の作成にあたりご協力下さいました血液内科の先生・看護師さん方。また、アンケートにご協力いただきました全国91施設の管理栄養士さんに心からの感謝をお伝えして稿を終了したいと思います。

(パンフレットイメージ図)

免疫抑制時の食事について

化学療法・造血細胞移植時、免疫機能が低下するため、食品を介した感染症に注意する必要があります。(基本は病院食を食べる様にしていただき、どうしても持ち込みたい場合は病棟スタッフへ確認して下さい)

● 加熱食・無菌室食について

【加熱食・無菌室食提供対象】

- ・治療中に好中球が500/mm³未満になっている方
 - ・治療中に下痢の症状が4回以上/日の方
- この時期は食品を介した感染症のリスクが高く、以下の点に注意した食事を提供しています。

提供していない食品	理由
飲料	なし
肉類	・炒めた惣菜を冷却して提供しています。 ・動物性食品は加熱した食材を提供しています。
肉類介類	なし
野菜	・生の野菜類は当院の衛生基準にそって調理していますので、提供しています。(トマトは傷み具合がわかりにくいので、生では提供していません。)
野菜のこぼれ	・生野菜類は当院の衛生基準にそって調理していますので、提供しています。(トマトは傷み具合がわかりにくいので、生では提供していません。)
豆・大豆	・豆類・豆類は加熱して提供しています。 ・肉類に添えられる納豆類は加熱しても菌は死滅しないので提供していません。 ・肉類は加熱した食材を提供しています。
卵	・卵類・豆腐は加熱して提供しています。
果物	・肉類で皮をむく・むきで食べる果物のみ提供しています。パナナは皮を剥いても傷んでいる可能性があるため提供していません。 (皮をむかない果物は加熱したもののみ提供しています) ・ドライフルーツはカビが生えやすいため、提供していません。
乳製品	・ヨーグルト・カビのついたチーズ(カマンベールチーズなど)
調味料	・はちみつ(加工品に含有している菌を含む)・つけ麺

● 低菌食について

【低菌食提供対象】

- ・造血細胞移植前後で免疫抑制剤内服中の方、かつ下痢の症状が4回未満/日の方
- 上記の方は感染に対する抵抗力が弱まっているため、下記の方に注意した食事を提供しています。

提供していない食品	理由
飲料	なし
肉類	・炒めた惣菜を冷却して提供しています。 ・動物性食品は加熱した食材を提供しています。
肉類介類	なし
野菜	・生の野菜類は当院の衛生基準にそって調理していますので、提供しています。(トマトは傷み具合がわかりにくいので、生では提供していません。)
野菜のこぼれ	・生野菜類は当院の衛生基準にそって調理していますので、提供しています。(トマトは傷み具合がわかりにくいので、生では提供していません。)
豆・大豆	・豆類・豆類は加熱して提供しています。 ・肉類に添えられる納豆類は加熱しても菌は死滅しないので提供していません。 ・肉類は加熱した食材を提供しています。
卵	・卵類・豆腐は加熱して提供しています。
果物	・肉類で皮をむく・むきで食べる果物のみ提供しています。(皮をむかない果物は加熱したもののみ提供していません。)
乳製品	・ヨーグルト・カビのついたチーズ(カマンベールチーズなど)
調味料	・はちみつ(加工品に含有している菌を含む)・つけ麺

● 食品を介した感染症を防ぐための原則 (入院中の注意)

- ①持ち込みの食品で賞味期限・消費期限の切れた食品は食べない。
- ②ペットボトルの飲料は直接口をつけず、開封後は冷蔵庫で保管し、24時間以内に処分する。
- ③調理済み食品を持ち込む際は、調理製造過程と保管状態の安全性が確認できるものを選択する。